

お彼岸



現代のお百姓は、だからもしほり取られません。

慈悲のなかから、如来のすべての徳を「南無阿弥陀仏」というよび声にこめてほどこし働きかけてくださつてゐるのです。

九月のこよみ

「お百姓なんかしなくとも食べていけるといふ人本
年々増えています。
祖先のような苦しさや歯がゆさは、もう味あわな
くてもよいかもしません。
だが、「なんのために働くのだろう」「なんのな
めに生きているのだろう」というつぶやきは、私た
ちの胸の深いところから消えさつとはいひような
思います。

「生きてよし・死してよし」
「生を歎び死を喜ぶ」
「輝いたいのちを生き、すばらしい死を死にきる」

—想いのまま生きる美しい死を死にきる
そんないのちに生きかえる世界。それを願い思
のが現代の私たちの「お彼岸」です。

「光にかがやくいのち」の岸にいたるには、仏教では古くから「六つの修道」（六波羅密）をいいま

1. 布施（ほどし）
2. 持戒（じかい）（生活規律の厳守
（たえしのぶ）
3. 忍辱（じみじゆ）

5. 禅定（心をこらす）
6. 智惠（ものの真実をみぬく）

「ハンニヤハラミツタ心經」というのは、このうちの第六番目の智慧について説かれているお經で

この六度の行は、まよひの「この岸」から、さ

とりの「他の岸」に因るかの行方を尋ねた。だが、わたしたちの祖先は、西のあかね空に合掌しお念仏申したとき、その声のなかにすでに私の

信知したのです。

まで知りつくし（智慧）、その私のために一心に心をこらし（禅定）、教いが成就するためには、どんな毒どんなわざわいの中にも身をおき耐えうるほんと（精進・忍辱・持戒）、その大いなる

わたしたちの祖先は、みんなお百姓でした。
一年中働き通じて、やつと手にした収穫も、ほと
んどお殿様や地主様のところに納めなければなりま
せん。
なんのために働くのか、なんのために生きている
のかと問われても、答えてみようもないような日ぐ
らしです。
稻のとり入れのころには、ひとしき切なさが胸に
つきあげてきたことでしょう。
西の空をいつぱいあかね色に染めて、まことに沈む
太陽のかなたに、お淨土をねがい思わずにはいらわ
なかつたことでしょう。
人が人をしいたげたり、いじめたり卑しめ合つた
りしなくともよい世界。だれもだれもが、ほとけさ
まの子として互いに尊びあえるお淨土。
「お彼岸」は、祖先たちがそのような思いで當も
できた仏教行事ではないでしょうか。

お説教 豊岡 応供内町 乗生師

人の悪いことはよく目にします。自分の悪いことにまではしあかりません。自分でも気がつかないものの中つによつ分でわかつた悪いことがでくたなからでも氣づいたんだ」とす心思分→あ自です。

蓮如上人



美くしい蓮の花を「ごてんまり」を供えていた
だきました。
水上の松本幸枝様の真心こめた作品です。

蓮の花は、如来さまのお慈悲をあらわす花です。高原の陸地によりも低湿地のどろのなかに咲き、この花は、どんなにきたないどろ中にうまれていても、何千年もくちることがあります。そしてまつすぐな茎をのばし、その上にあの消淨な花を咲かせるのです。「悪人正機」と五濁の災煩惱の私ゆえには、たらきかけてくださいの如来さまのおはたらきのかぎりをつくしたお念佛が、いま私の口から出でてくださいます。

私の欲や腹立ちの中に咲き出でくださるお慈悲にからめとられて、私も蓮の花のなかに生きかえさせていただくのです。

如来さまは、「念佛をとなえてくれる人を、「あゝ、蓮の花のなかの人だ」（妙好人・最勝人・上人など）とおほめになります。

- | | |
|----|-----------------|
| 四日 | 「昭法のつどい」（京都） |
| 五日 | 出石細門徒縁代研修会（高福寺） |
| 六日 | 組画委嘱諮詢委員会（神戸） |
| 七日 | 出石高校六十周年記念式 |